

## これからの創造のためのプラットフォーム

### A Platform for Creation in the Future

前林明次

MAEBAYASHI Akitsugu

**Abstract** 2014年4月よりスタートした「これからの創造のためのプラットフォーム」は、食、住、情報社会、アート、工学、地域コミュニティなどの分野から講師を招き、全7回のレクチャーと1回のワークショップをシリーズとして開催した。また、毎回のレクチャーは文字に起こされ、それに対する考察と合わせてウェブ上で発信された[1]。本稿においては、このプロジェクトを始めた背景と狙いを述べた上で、各レクチャーを考察する。また本紀要に掲載された6回分のレクチャー記録と、それに寄せられた佐原浩一郎の論考も合わせて一読されたい。

#### 1. 背景と狙い

現代社会を生き抜くための「技法」(アート)とは何か。また、それを共有する場をどのように構築できるのか。そのような問いが「これからの創造のためのプラットフォーム」には込められている。つまり、アートを既存のカテゴリーとして固定的に捉えるのではなく、それを現代の生の課題に包括的に取り組むための「技術」あるいは「技法」として捉えなおしてみるということである。このことは、私たちがこれまで何をアートと呼び、何をそう呼んでこなかったのか、その境界線を一旦取払い、検証することにもつながっていくだろう。そしてそのとき現れるキーワードが「創造」、「創造性」ということになる。

創造性を、生き延びていく力、と捉えれば、それは「今、自分がどこにいて、何をやるのか」が把握できなければ発揮しようがない。船の乗組員にとって、航海が順調なときと転覆寸前では創造性の発揮の仕方は自ずと違ってくるように、私たちが創造的であるためには、外部環境を的確に把握することと、それを社会で共有することが欠かせない。ちなみに、ここで言う「外部環境の把握」とは、私たちが巻き込まれている社会システムがどのようなものであり、それがどのような構想のもとに進められ、良い面でも悪い面でもどのような影響を社会生活に及ぼしているのかを感じとり、知ることである。

しかし現在、「外部環境の把握」はますます困難になってきている。なぜなら、そのための重要なシステムであるはずのマスメディアが、現在の日本においてはその機能を十分に果たしていないとされているし[2]、また、メディアを利用する側においても、スマートフォンをはじめとする情報端末やSNSなどの情報共有プラットフォームの普及により、関心のある情報や、好ましい情報のみを自分の周りに張り巡らせ、それを共有する者同士での閉じたコミュニケーションへと没入していくことが可能となっているからだ。

ところで、なぜ、私たちはそのように外部を遮断し、内部のみへと関心を高めていく方向に向かっていくのだろうか。それはおそらく、そのような「効率化」によって得られる「力」が、現代の重要な価値の一つとなっているからなのではないか。だからこそ私たちは絶えず変化する外部を「想定外」として切り捨て、その内部（＝「ムラ」）における最適化のゲームに没頭していくのである。しかし、ここには二つの問題があるように見える。ひとつは（想定された）外部状況や前提条件が一変したとき、そのシステム自体が「用無し」となってしまう可能性であり、もうひとつは、システムが盲目的に内部最適化を図るあまりに、人間の生や生活の条件までもが外部に追いやられ、結果としてシステムそのものが擦り切れ、立ち行かなくなる可能性である。そしてこの問題は、私たちにとってそれほど遠いところにあるわけではない。

2011年3月11日の東日本大震災における福島第一原発事故とその対応が「第二の敗戦」[3]と呼ばれるように、その事故の本質的な要因として私たちの社会が抱える、ある傾向が指摘されてきた。時代を逆のぼれば、第二次大戦での日本の敗戦の分析を行った山本七平はその著書『「空気」の研究』において、「臨在感的な対象把握」（その場その場で、ある事柄を根拠なく絶対視してしまうこと）により人々の思考を拘束する「力」、つまり「空気」による支配が社会に破滅的な結果をもたらす危険性について指摘したうえで、そこから脱するには、あらゆる思考の拘束を断ち切り、模索を続けるしかないのだ[4]、と述べている。このメッセージをシンプルに言い換えれば、われわれひとりひとりが、思考停止に陥らずに物事を考え続けていく習慣を身につける必要がある、ということになるだろう。では、これを私たちの「生の課題」として自らに組み込み、持続させていくためにはどうすればいいのだろうか。

「これからの創造のためのプラットフォーム」の「プラットフォーム」とは、様々な活動を可能にする「場」あるいは「基盤」のことであり、それはつまり「社会」を言い換えたものである。私たちは、このプラットフォームの構築や維持に対して、これまでどれだけ関心を払ってきただろうか。例えば、「アート」を持続させるということは、アートを生み出せる「個」や「社会」のポテンシャルを持続させることであって、現状の「システム」をそのまま存続させることを必ずしも意味しない。そしてそのことは「食」や「住」や「学校」から、「経済」や「政治」まで、この社会のあらゆるシステムについても言えることだろう。そして、現状のシステムがその本来の目的からあまりにかけ離れてしまったのであれば、それを修正することは勿論、新しい仕組みを提案したり、時にはその仕組み自体を拒否することも必要になるだろう。そして、ここでもなによりも重要なのは、社会というプラットフォームを持続させていくという点において、様々な分野におけるあらゆる営みや試みが「共通の課題をもつ」ということである。

このレクチャー・シリーズでは、幅広く、様々な分野における実践を、ここ数年のセミナーや出会いの中から見出していくことになった。それぞれが活動する分野やテーマを入り口として、彼らがどのようなパースペクティブによって現代社会を捉え、どのような展望を切り拓こうとしているのか。それらを積極的に見出していくことが、今度は私たちの創造的実践となるだろう。2014年度におけるレクチャーは次に示す通りである。

2014.04.29

第1回 『生きるための昆虫食』

講師：野中健一（立教大学・教授）

2014.05.17

第2回 『セルフビルドという思想』

講師：清水陽介（どっぽ村エコワークス代表）、黒川大輔（木工房「結」主宰）

2014.06.21

第3回 『国家とインターネット』

講師：和田伸一郎（中部大学・准教授）

2014.07.28

第4回 『フランス・アリスー境界線上で生まれる物語』

講師：吉崎和彦（東京都現代美術館・学芸員）

2014.09.21

第5回 『大人の食育』ワークショップ

講師：清水康生・恵 夫妻（岐阜県大垣市・レストラン「トリコロレ」経営）

2014.11.06

第6回 『弱いロボットでできないという可能性』

講師：岡田美智男（豊橋技術科学大学・教授）

2014.12.18

第7回 『つくられていく地域一揖斐郡・池田町での実践』

講師：土川修平（岐阜県揖斐郡池田町・土川商店経営）

2015.02.21

第8回 『えをかく かく かく！一今を生きるために欠かせないもの』

講師：アーサー・ビナード（詩人）

※本稿執筆時期の都合上、本レクチャの記録と考察は掲載されていない。

## 2. レクチャーの考察

### 2.1 『生きるための昆虫食』

Food（食）か、Feed（餌）か。将来の食糧危機に対応するため、FAO（国際連合食料農業機関）が推奨する代替タンパク源としての昆虫食という文脈[5]では、愉しく、美味しいものを食べるという自然環境と密接に関わった、文化としての昆虫食という側面が軽んじられてしまう。「生き物」を「食べ物」へと変えてきた創意工夫が、食を創造的で楽しいものにしてきたのなら、愉しみが切り離された食、つまり餌は、非常時の生存には役立っても、持続

的な食の文化としては受け入れ難い。私たちは我慢や抑圧によってものごとを持続させることはできないのだ。では現代においてわれわれはなにを、どのように食べ、生きているのか。現在流通している食品の多くは様々な人工添加物を含む「工業製品」あるいは操作された「人工物」に近いと言われており、その生産や流通、広告のシステムは全体像がわからないほど複雑で巨大なものでもある。そのような環境の中で、「自然由来」の昆虫を食べるときに感じる違和感は、巨大なシステムに依存せざるを得ない私たちの「食」が持続可能かどうかという問題を突きつけている。

## 2.2 『セルフビルドという思想』

「巨大なシステムへの依存」は、現在の住宅市場において「住宅」を購入するときにも当てはまるだろう。多くの場合、住宅を買うことはそのシステムへの服従を意味することにもなる。それを打開するためには、「買う人」であると同時に「つくる人」でもあること、あるいは「自分でつくる」部分を増やしていくことで、選択肢を増やすことである。このような「力」を手にするとは、「これしかできない」から「こうやればできる」という、私たちの総合的な「力能」を高めていくことにもつながっていくのではないか。また、「買う人／つくる人」という二元化に抗い、「買う人でもあり、つくる人でもある」という「グレーゾーン」＝「可動域」を自分の中につくりだしていくことは、社会の中に多様な関係性をつくりだしていくための素地にもなるだろう。このような視点において、昔から伝承されてきた知恵や技を見直し、再び利用することは、過剰にシステムに依存せざるを得ない現状からの戦術的な後退であり、主体的に愉しく生きるための模索へとつながっていく。

## 2.3 『国家とインターネット』

ここでは「社会」と「生産」（＝個による創造行為）との関係について考えてみたい。以下の和田伸一郎氏のレクチャーでの発言と、『つくられていく地域一揖斐郡・池田町での実践』での土川修平氏のレクチャーの発言を合わせて考えてみる。

和田氏：（創造行為は）何か役に立たないと駄目、みたいな言い方がされるわけですが、そうじゃないと思うんですね。そういうフィクションを否定して、創造行為自体の喜びを追求する、まあ一つの不可能な理念、理想として、こういう言い方をあえてしてみたいというわけです。それでいいんじゃないかなと思います。

土川氏：（人は）一人では生きていけないので何人かが集まって社会をつくっていく。そうすると、誰かが我慢をしながら生きていかなくてもはいけない。つまり、個人が自由にやりたいようにはできなくなる。それでも個人はその中でもっとも自由に生きる方法を探っていく、それを繰り返しながら歴史は動いてきたんです。

この両者の発言から共通して読み取れるのは「社会」と「個」のあいだの利害の不一致の可能性であり、また、「役に立つ／役に立たない」、「我慢／自由」などの対極のあいだで揺れ動く人間の「あり様」の問題でもある。私たちはただ「社会のため」に生きることもできなければ、「自分のため」だけに生きることもできない。アリやハチなどの社会性昆虫の研究で知られる生物学者エドワード・O・ウィルソンは、この利他と利己の間の衝突や葛藤こそが人間の条件であり、法律から創造的な芸術に至る人文科学のテーマのすべてはここから

生まれる[6]、という。そして私たちは「ひどいものとすばらしいもの」とともになんとかうまくやっていくしかないし、それこそが私たちの可能性でもあるのだ[7]、と。私たちは、その意味において、自らの中にある対極的なもののあいだの振幅をもっと大きくしていかななくてはならないのかも知れない。なぜならそこで生じる葛藤や衝突こそが新たな創造の条件となるのだから。そしてそこでは創造行為自体の喜びを追求することと、社会というプラットフォームへのコミットメントは必ずしも相反しないのだろう。

## 2.4 『フランシス・アリス—境界線上で生まれる物語』

フランシス・アリスの《トルネード》という作品は、彼自身がビデオカメラをもって、竜巻に向かって飛び込んでいくアクションの記録である。彼はこの行為をメキシコのミルパ・アルタで、10年間続けたという。この作品を見て、私はある体験を思い出した。それは、高校生の頃、台風が近づいている時期に友達と海岸にいて、数回に1回ぐらいの間隔でやってくる大きな波に巻き込まれる、という遊びである。大きな波の中ではまったく手も足も出せず、ただその力に身体を任せ、転がり、砂浜に打ちつけられるのを待つだけである。それはおそらく数秒の出来事で、起き上がるときには、上下の感覚を取り戻すのに一瞬、時間がかかる。そして砂のまじった唾を吐き出しては、またその行為を何度も繰り返すのだ。それにしてもなぜ、私たちはこのような「何にもならない」遊びに惹かれ、興じるのだろうか。そしてそれがなぜ「彼だけ」でもなく「私だけ」でもなく「われわれ」のあいだに共鳴するのか。ヨハン・ホイジンガは『ホモ・ルーデンス』において、この遊びの迫力、人を夢中にさせる力にこそ遊びの本質がある[8]、という。また、遊びは秩序を創っている[9]、とも。ということだろうか。私たちは、遊びに夢中になるとき、そこに、ある「生き生きとした現実」をつかみとる。それは決して言語化できるような性質のものではないが、この何かをつかんだというイメージ、「確かさ」の感覚こそが、なにかを新しくとらえ、つくり出す契機となるのではないか。遊びがもつ、このような性質を考えると、フランシス・アリスのもうひとつの作品、世界各地の子どもたちの様々な遊びを映像により記録するという《子供の遊び》シリーズは、遊びという創造の現場を見守りながら、子どもたちの「生き生きとした現実」の感覚を捉え、伝える、希望の試みと見ることができる。

## 2.5 『大人の食育』

福岡伸一の『生命と食』によれば、私たちの身体の構成成分は取り込まれる食物の成分と常に入れ替わっており、生命は常にこの絶え間ない「流れ」の中にある[10]、という。この意味において、私たちの身体が食べるものによって形作られるということは、比喩ではなく、事実である。そしてここで問われるべきなのは、現代の食の環境やシステムの「流れ」の中におかれている私たちの「身体」がどのように形作られているかを想像し、知ろうとすることである。それは私たちが現代において生きていくのに欠かせないひとつの「技法」といえるだろう。

## 2.6 『弱いロボット—できないという可能性』

「ひとりでできる」という価値観の限界、あらゆる達成や責任を個体に帰属させてしまうという錯誤。そのことによって社会としてのレジリエンス（回復力）が失われていく。私たちはこの負のスパイラルから脱するときに来ているのではないか。これまで「自立」とは、個体の能力をいかに上げるかを問題にしてきたが、関係論的にみれば、自立とは、多様な依

存関係をつくり出せること、と言えるのだ。個体が初期状態では無力であり、そこに機能や能力がひとつひとつ付け加えられていくことで自立していくというモデルでは、赤ちゃんが泣くことでお乳を飲むことができる、という事実を説明はできない。これをひとつの「力能」として捉えるなら、それは予定され、支えられる関係の中で可能になるものであり、その関係性は人間の「不完結」な身体をベースに築かれているものである。岡田氏は、私たちのなにげない発話の一言ですらそこには「不定さ」（一種の「賭け」のような要素）があり、それこそが他者とのコミュニケーションの余地を生んでいる[11]、という。このようなイメージをもつことでわたしの身体はすこしだけ軽くなる。わたしはすべてをもつ必要はないし、できない。そしてこのとき、「われわれ」という言葉もこれまでとは違う響きをもつように感じられるのだ。

## 2.7 『つくられていく地域一揖斐郡・池田町での実践』

「地域社会」を、様々な活動を可能にする「基盤」、つまり「プラットフォーム」として捉えてみるととても興味深い。現代社会の急激な情勢変化の中で「地域社会」においても、その構成員や、そこに暮らす人々の考え方、人同士のつながりは絶えず変化している。そのような場に一定のものさしをあてただけで「活性化」することはできないし、安易に「町おこし」という外部的な視点を導入することは、あまりに一元的な競争原理へと人々を縛り付け、抑圧し、結果的に持続的なものにはならないだろう。なにかをつくることは、内発的な動機によってはじめられ、それがうれしいからこそ続けていけるものだからだ。その意味で目標の設定はシンプルでざっくりとしたものが相応しいのかも知れない。「この地域に文化の薫りを漂わせることによって普遍的な価値を発信する」というように。そしてそれを実現するためには、調達できるあらゆる資源と人的ネットワークを利用し、その地での「具体性」を模索していくことになるのだろう。社会学者の小熊英二は、「社会」を「宴会」に喩え、強いリーダー＝幹事に宴会のあり方をお任せする、というやり方はもう限界にきている、という。幹事ひとりの手で参加者の多様化するニーズをすべて満足させることは到底不可能であるし、そのような参加者の依存的な態度には、そもそも主体性も創造性もない。そこで、「鍋を囲む」ような直接参加のあり方が提案される。幹事はせいぜい会場を設定するだけで、そこにみんなで材料を持ち込む。人が大勢になったら鍋を増やしていき、調理の仕方はそれぞれのサークルに任せればいい。そのような形態の中で「わたし」を超える「われわれ」という感覚を育てていったらどうか[12]、と。そしてそれは実際に、土川ガーデンで起こっていることでもある。

## 謝辞

まずなによりも、このレクチャー・シリーズでの講義およびワークショップを「二つ返事」で快く受けていただいた講師の方々に心から感謝いたします。またご自身の研究分野における活動を、本シリーズのテーマであるアートや創造性という文脈に最大限重ね合わせてお話いただき、多くのヒントをいただけたことはこの上ない喜びとなりました。

このプロジェクトを始めるにあたっては、2011年から取り組んだ IAMAS でのモチーフワークという授業のあり方を考えるためのリサーチや議論が大いにヒントになっています。その過程において、幅広い視野からインスピレーションに富む助言をしてくれた本学教員のジェームス・ギブソンさん、アーティストの笹口数さん、そしてレクチャーの膨大な文字起こ

しと、時間を忘れるほどの議論に付き合い、また本紀要においても論考を寄せてくれた佐原浩一郎さんに感謝します。また、レクチャー会場の設営や映像記録、懇親会ではたこ焼きを振る舞ってくれた RCIC 研究員の八嶋有司さん、ブログのタイトルおよびレクチャーのチラシをデザインしてくれた内田聖良さん、最後にももちろん、このレクチャー・シリーズに参加して支えてくれた学生や教員の方々、このレクチャーのために IAMAS まで足を運んで下さり、知り合えた地域の方々にもお礼を申し上げます。ありがとうございました。

## 参考文献

- [1] <http://sozonoplatform.blogspot.jp>
- [2] 青木理、神保哲生、高田昌幸『メディアの罠 権力に加担する新聞・テレビの深層』産学社, 2012, p.240-p.241
- [3] 船橋洋一『原発敗戦』文春新書, 2014, p.20, p.267
- [4] 『われわれは確かに「世界の趨勢」を追っかけて来たし、これが「趨勢だ」ですべてがすんだ時代には「自由」は「不能率」の同義語として笑殺してよかったし、その方が問題が少なかった。ただ、この方法が通用しない位置に達したとき、その「何かの力」は方向を失い、新しい臨在感的把握の対象を求めて徒に右往左往し、衝突し、狂騒状態を現出して自らの「力」を破滅的にしか作用し得なくなって当然である。その力は破滅と知りつつ外部に突出もしようし、内部的混乱で自壊することもある。そしてその時にそれから脱却しうる唯一の道は、前述のあらゆる拘束を自らの意志で断ち切った「思考の自由」と、それに基づく模索だけである。』 山本七平『「空気」の研究』文春文庫、1983、p.168-p.169
- [5] 「森林の産出物は飢餓との闘いに重要一特に昆虫」 <http://www.fao.or.jp/detail/article/1059.html> 2014.1.20 確認
- [6] 『道徳の起源——エドワード・O・ウィルソンとのインタビュー (2) 』 <http://shin-nikki.blog.so-net.ne.jp/> 2013-03-01 2015.1.25 確認
- [7] 「結局のところ、人間の条件は、われわれを生み出した進化のプロセスに根差した、その環境に固有の混沌としたものののだ。われわれの本性には、ひどいものとすばらしいものが共存しており、だから今後もそうありつづけるだろう。それを消し去ると、そんなことが可能だとして、われわれはヒト未満の存在になってしまうはずだ。」エドワード・O・ウィルソン 斉藤隆央訳『人類はどこから来て、どこへ行くのか』原題: The Social Conquest of Earth, 化学同人, 2013, p.63-p.64
- [8] ヨハン・ホイジンガ 高橋英夫訳『ホモ・ルーデンス』中公文庫, 1973, p.18-p.19
- [9] 同書, p.35
- [10] 福岡伸一『生命と食』岩波ブックレット No.736, 2008 p.7-p.14
- [11] 岡田美智男 松木光太郎 編著『ロボットの悲しみ コミュニケーションをめぐる人とロボットの生態学』新曜社, 2014, p.12-p.13
- [12] 小熊英二『社会を変えるには』講談社現代新書, 2012, p.445-p.450